

実践報告

TEA における分岐点分析の提案と描き方

記号論的文化心理学に基づく質的研究法の新展開

発行：2025 年 3 月 31 日

中田 友貴 (神戸大学大学院人文学研究科)

福山 未智 (立命館大学大学院人間科学研究科)

安田 裕子 (立命館大学総合心理学部)

サトウ タツヤ (立命館大学総合心理学部)

抄 録

本論文では、複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: TEA) における新たな手法として「分岐点分析」の手法を提案し、その描き方について紹介する。従来の TEA での分析では、変容プロセスにおける転換点としての分岐点や、記号を捉えることが重要な課題の 1 つとされてきた。本研究では、発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis) の理論枠組みを用い、また徹底的行動主義の考えを取り入れた「分岐点分析」を提案する。本分析は、感情や思考を含むすべてを行為としてまず捉え、その中で行為として分類しきれない要素を記号や価値として整理する手法である。大学院進学に至る意欲の変容プロセスを対象とした、2 つの事例から分岐点分析の方法や可視化、および変容のプロセスの中で記号を理解するための重要な手がかりとなることを示す。本論文で提案する分岐点分析は、プロセスの変容を読み解く可能性をひらく新たな質的研究手法であるといえる。

キーワード：分岐点分析、複線径路等至性アプローチ (TEA)、記号論的文化心理学

連絡先：中田 友貴 (E-mail: dj.y.nakata@gmail.com)



pp. 72-84

Practical Research

Proposal and Illustration of Branch Point Analysis in TEA

A New Development in Qualitative Research Methods
Based on Semiotic Cultural Psychology

Published: March 31, 2025

Yuki Inoue Nakata (Graduate School of Humanities and Faculty of Letters, Kobe University)

Michi Fukuyama (Graduate School of Human Science, Ritsumeikan University)

Yuko Yasuda (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

Tatsuya Sato (College of Comprehensive Psychology, Ritsumeikan University)

Abstract

In this paper, we propose a method called “Branch Point Analysis” within the Trajectory Equifinality Approach (TEA) and introduce its visualization techniques. In research employing conventional TEA analysis, capturing branch points as turning points of transformation and understanding acts, signs, and values have been regarded as one of the most essential tasks. Branch Point Analysis is an approach that adopts the Three Layers Model of Genesis (TLMG) theoretical framework and incorporates the perspective of Radical Behaviorism to understand transformational processes. This method initially treats all elements, including emotions and thoughts, as actions, then classifies elements that cannot be categorized as actions into signs and values. Using two case studies focusing on the transformational process of motivation leading to graduate school enrollment, we demonstrate how Branch Point Analysis provides key insights into the role of signs and their visual representation in the transformation process. The analysis distinguishes between promotive signs, which drive actions, and inhibitory signs, which constrain them, highlighting their impact on value transformations. This method enhances our ability to identify and illustrate significant turning points in transformational processes. The proposed Branch Point Analysis serves as a novel qualitative research method, offering new possibilities for interpreting and visualizing complex transformational processes while maintaining flexibility and adaptability to diverse research contexts.

keywords: Branch Point Analysis, Trajectory Equifinality Approach (TEA),
Semiotic Cultural Psychology

Correspondence concerning this article should be sent to:
Yuki Inoue Nakata (E-mail: dj.y.nakata@gmail.com)

I はじめに

1 TEA の展開と次なる課題 一分岐点と記号の捉えかた

複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach：以下、TEA) は記号論的文化心理学に基づく質的研究の分析手法のひとつとして複線径路等至性モデルリング (複線径路等至性モデルから改称、Trajectory Equifinality Modeling：以下、TEM) が提唱されたことに端を発し (サトウ他 2006)、理論的・方法論的精緻化がなされ、現在では心理学のみならず看護、教育などの様々な分野の研究で用いられている。TEA は文化心理学に依拠し、人が生きる文化化 (culturalization) の過程を記述する TEM を中心に、研究者が関心をもっているある特定の経験をした人を研究対象に選定する理論としての歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting：以下、HSI)、分岐点での自己の変容を可視化する発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis：以下、TLMG) により構成される。TEA の発展はめざましく、その成果として『TEA による対人援助プロセスと分岐の記述』 (安田・サトウ 2022) や『TEA カタログ』 (サトウ・安田 2023) などの書籍で TEA を分析に用いた研究がまとめられている。また、2022 年には TEA と質的探究学会が設立され、2023 年には学会誌『TEA と質的探究』が創刊された。

TEA は KJ 法 (川喜田 1967) やグラウンデッド・セオリー・アプローチ (Glaser & Strauss 1967=1996) などの質的研究法と異なり、「標準」的な分析手続きを定めていない点が特徴であるという (荒川他 2012)。こうした TEA の特徴は、正しいやり方を求めがちな初学者にはわか

りにくいという欠点があるものの、それぞれの研究者がそれぞれの興味や関心に基づいて分析手法や描出方法を創意工夫する余地があることを意味する。それゆえ、質的研究法として発展する可能性が常に残されているという見方もでき、標準化された描き方が奨励されているというよりはその多様性を楽しむという側面がある。サトウ・安田 (2023) による『TEA カタログ』を見ると TEA で分析した図には様々なバリエーションがあることがわかる。

さて、TEA の誕生の起点となっている TEM は、いくつかの概念を用いて変容プロセスを捉えるよう提唱されたものである。なかでも、発生を捉える分岐点の概念が、変容の転換点を可視化するうえで活用されている。そして、TEM で捉えられた分岐点について、その発生の様相をより緻密に捉えるうえで発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis：以下、TLMG) が用いられるようになってきた。TLMG は、個人等の行為の連鎖を記述する活動レベル (第一層)、サインの発生を可視化する記号レベル (第二層)、価値観の変容を描く信念・価値観レベル (第三層) により、自己の内的変容過程を捉える方法論である。TLMG では、行為を価値観との関係で捉えようとするが、とりわけ、第 2 層で可視化する記号をいかに記述するかが、おもしろくも難しい課題とされている。すなわち、分岐点をいかに捉えるか、記号をいかに描き出すかということが、TEA を用いて分析をするうえでの重要課題のひとつとして認識されているのである。

2 分岐点の理論的な枠組みと分析の提案

本論文では、記号をいかに捉えるかに関する検討を進めるうえで、TLMG の理論枠組みを用い、また徹底的行動主義の考えを取り入れた「分岐点分析」を提案する。その要点は、何が記号かを考えるのではなく、まずは、研究課題に即して

捉えるべき行為の時系列的変容を可視化し、そのうえでなお行為と判断しがたいものを記号とみなす、というものである。こうした考え方は決して新しいものではなく、「私的できごと（言語や内省、感情、思考など）はすべて行動として捉える」ことを主張する Skinner, B. F. の徹底的行動主義（Radical Behaviorism）の考え（e. g. Skinner 1974）を参考にしたものである。徹底的行動主義と文化心理学の接点がどこにあるか疑問をいだかせる可能性があるが、Skinner は、オペラント条件づけ、文化、進化を、時間のスケールの違いはあるものの同じメカニズムであるとし、文化を集会的な随伴性（Contingency）と考えていた（Skinner 1988）。したがって徹底的行動主義の考えに基づく分析を検討することは、荒唐無稽なことではなく、行為を捉え直す手法のヒントを徹底的行動主義の考え方に求めるといことなのである。具体的には、対象者の語りに現れる様々な思考・感情・出来事をまず行動として考え、一連の語られた内容についてプロセスを描き、それでも行動でないほうがよいと認識されるものを記号や価値として捉えていくという手法の確立を目的としている。

3 本論文の構成と分析対象

本論文では徹底的行動主義に基づく分岐点分析の手続きを提案するうえで、「大学生のやる気はなぜなくなるのか？ どのようにしてなくならないようにできるのか？」について探究するべく収集したインタビューデータを用いる。

このデータは、心理系大学院に入学した大学院生を対象とした、対人援助にかかわる実習系の授業にて収集されたものである。データ収集は、大学生活における、挫折経験や認識の転換を含む意欲（やる気）の変容過程を明らかにすることを目的として実施された。受講生である大学院生がペアになって当該経験に関するインタ

ビューを互いに行う形式で、それぞれ1回のインタビューが行われた。なお、受講生には、本分岐点分析の検討を進めるうえで、データの再分析に関する同意を得た。本論文では、受講生が収集したデータのうち、大学卒業直後に修士課程に進学した者の、大学院進学に至る意欲の変容を描くという観点から2事例を分析対象として選定し、分岐点分析を実施したものを紹介する。

まず分析1として、分岐点分析の基本的な手続きについて説明を行う。そして分析2として、促進的記号および抑制的記号の描出を取り入れた方法を説明する。促進的記号とは行動を駆り立てる記号であり、人間にとっての未来を志向する時間を拡張し、ありうる未来を構築するガイドとして機能するものである。一方で抑制的記号とは行動を妨げる記号であり、さまざまな記号に囲まれる状況において、あることをさせないように働く記号のことである（サトウ 2023）。

II 分岐点分析 1—基本的な分析手続き

1 分析手続き

分析1では、A氏を対象としたインタビューデータを用いた。まず、(1) インタビューの逐語録から問投詞などを取り除き、意味のまとまりごとにデータを切片化した。次に、(2) 大学生活における意欲の変遷にかかわる、感情や思考を含むすべての切片化したデータを、上述の徹底的行動主義の考え（Skinner 1974）を取り入れ、まずは行為として扱い、「活動」レベルに時系列に整理しその連鎖を描いた（これを「行為連鎖記述法」と呼ぶことにする）。そのうえで、(3) 行為を、「活動」のまま捉えるべきか否かを検討し、「記号」もしくは「価値」として捉えるべきであると考えられるものを抽出し、各レベルに配置

した。

なお3つのレベルでの検討に際し、「記号」はValsinerの「未来と向き合う何らかの機能を持ち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」(サトウ 2023)という定義を採用した。そして「価値」は時間的に大きく影響を行う信念や考えを分類した。

2 結果

以下ではまず、A氏の大学院進学に至る意欲の変容過程を、活動、記号、価値の3つのレベルで整理した図を提示する(図1)。そのうえで、図に基づき、大学院進学に至る意欲の変容過程について説明する。その際、活動を「」で、記号を『』で、価値を【】で示す。

A氏は中学生の際に「テニス部に所属」した。そして、テニス部の活動を通じて顧問の指導に影響を受け、『テニス部顧問の教員への憧れを持つ』。そして将来的に顧問のような【教員となり、後進を育てたい】という志を持つことに至った。

そのため「中高の先生になりたい」を考えるようになり、大学受験の際に教員免許をとることを目的に大学の志望校を決定した。そして「大学受験で第2志望であった大学に合格」し、東京にある大学の教育学部に入学する。しかし「第2志望に決まったという学歴コンプレックスを持つ」た。そのため、『プラスになるような経験を積んでおきたいと思』った。

プラスになるような経験のために、「塾講師として働く」ものの、「教えるのは面白くないと感じる」ようになり、さらに「大学での教育学の講義での学び」から「部活顧問の厳しい状況を知る」。そして「中高生対象の放課後ボランティアを行う」中で、自身が「中高生と関わるのは苦手と知」って、教員となるという熱意が次第に薄れていった。

一方で大学入学当初から参加していた、「留学

生支援学生団体での活動」に対してはモチベーションが維持され続け、『人と関わることへの興味があると認識する』。3回生になり、留学生支援学生団体の引退と「就職活動の開始」とともに、「将来がわからなくなる」と感じ悩むなかで、哲学や思想や宗教に関心を持つようになり、書籍を読むようになる。そして読んでいた書籍の中から「臨床心理学を知」り、「河合隼雄の本を読み」、「教えるというよりは、対等に近い形で向き合っていくとか、相手のことを理解していく、という臨床心理士の姿勢を知る」ことで、『対等に近い形で向き合う援助職になる将来像を持つ』。そして「臨床心理士」を志し、受験勉強が間に合わないことから「休学して大学院受験の勉強を行う」。そして、大学院入試に受かったことから、「復学して卒業する」。この時期から【人の支援を行いたい】という価値の変容が見られた。

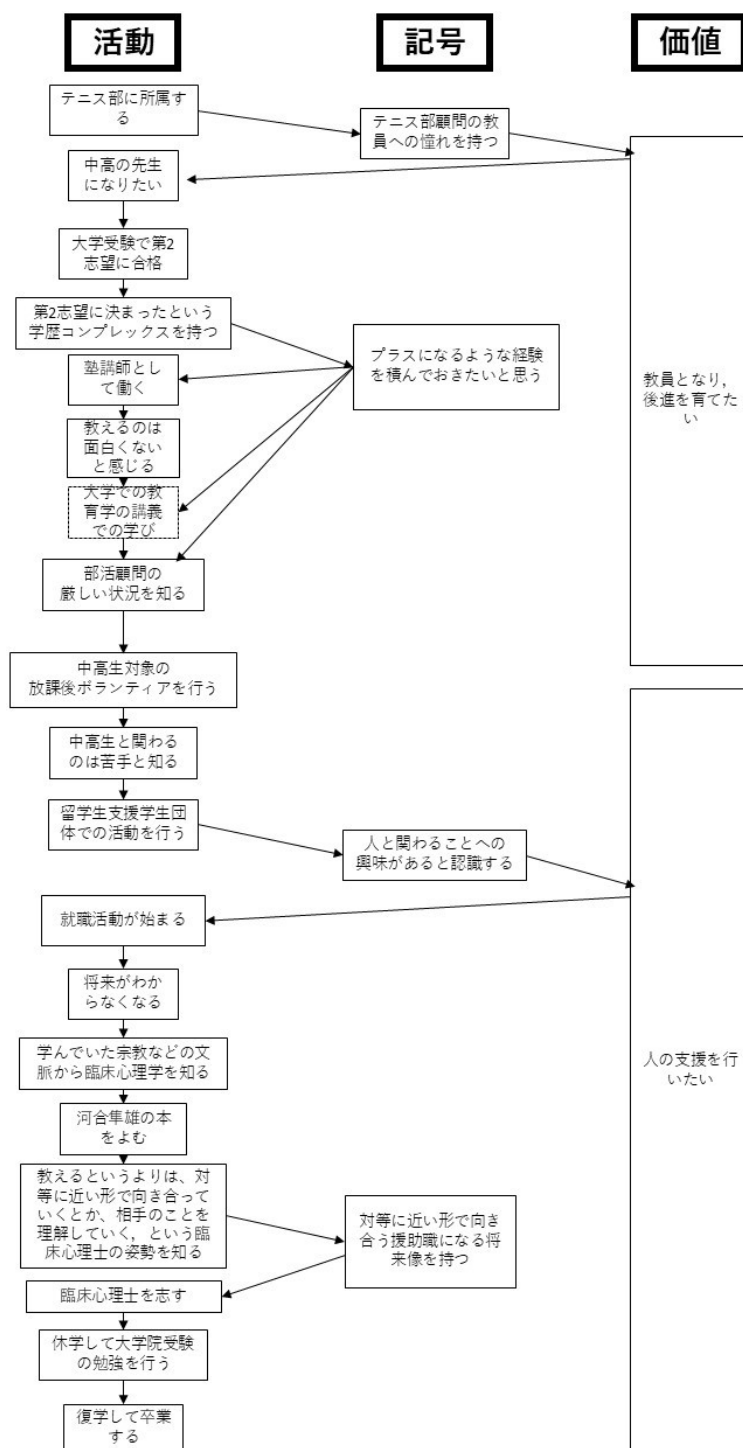
III 分岐点分析 2

—促進的記号・抑制的記号の描出

1 分析手続き

B氏を対象としたインタビューデータを用いて、分析1と同じ手続きで分析を行った。加えて、記号に関し、促進的記号と抑制的記号にわけて捉えた。その際、記号を「未来と向き合う何らかの機能を持ち、過去の状態から何か新しいことへと導く何か」であるとした。さらには上述のように、促進的記号を、行動を駆り立て、あらゆる未来を構築するガイドとして機能するものとして、そして抑制的記号を、あることをさせないように働くものとして分析した。

図1 A氏の大学院進学までのに至る変容過程



2 結果

以下では、B 氏の大学院進学に至る意欲の変容過程を、活動、記号、価値の3つのレベルで整理した図を提示する。その際、1. 1 回生～2 回生での初めてのインド訪問（図 2a）、2. 2 回生での初めてのインド訪問～3 回生インターン（図 2b）、3. 3 回生インターン～卒業（図 2b）と3つの時期に分ける。そのうえで、図に基づき、大学院進学に至る意欲の変容過程について説明する。その際同様に、活動を「 」で、記号を『 』で、価値を【 】で示す。

(1) 1 回生～2 回生での初めてのインド訪問

B 氏は、「C 高校から D 大学の現代社会学部へ内部進学」した。E 大学も選択できたが D 大学を選んだという点にプライドをもっており、また内部進学の中でも自分は「C 高校出身から D 大学を選んだプライド」をもっていた。それ故に、「遊び惚けて学業をおろそかにはしたくない」という考えを持っていた。

入学後すぐに「履修した外国語の授業」は英語も第二外国語であるフランス語も B 氏にとってはレベルが低く、また高校時代と違い周りのやる気も低く、「授業も周りの学生のレベルが低い」と学生生活に対するモチベーションが緩やかに下がる日々を過ごしていた。B 氏は「教職課程に進むことを考えて」いたため秋学期に「教職関連授業を履修」した。授業を履修することで「改めて自分が教員となってやりたい事を考えた」際に、「日本の教職では自分の希望は叶わないと思い」、「教職課程に進むことは辞めた」。しかし、「自分が履修を決めたことなので授業はやり切った」。

2 回生になった B 氏は、「とある授業を履修」した。その授業の担当教員は大学には非常勤講

師として勤務しており、インドでボランティア活動を主催している人だった。B 氏はこの「先生との授業前の会話」から「自分の事を理解してもらえたと感じ」、「先生の人間性に惹かれていった」。そして、「先生が物事をどのように見るのか、価値観が知りたくなった」。夏に「ボランティア活動でインドへ行った」が、この時はインド自体に興味が強かったわけではなく、もともと持っていた「ボランティアへの興味と先生への興味が重なった」ためであった。B 氏は「インドでボランティア活動を行う」中で『現地のスラム街に住む子ども達と交流した』。この経験から「自分の恵まれた状況を実感」した。

(2) 2 回生での初めてのインド訪問～3 回生インターン

「自分の恵まれた状況を実感」した B 氏は、インドに行く前の「モチベーションが低い状態の自分ではだめだ、子どもたちに失礼だと感じた」。また、インドという場所が何となく「自分にハマったような感覚を得た」。インドから帰ると「デング熱に感染、発症」してしまった。「死ぬかもしれない、死んでもいいかなと思った」が、「熱の妄想の中ではあるが、まだ自分にはできることがある、神様に生かされていると感じた」。一度感染したため、ワクチンを打たなければ次に感染した場合にアナフィラキシーショック（著者注：デング熱ショック症候群か）が起きる可能性が高い状態になってしまった。「冬のインドへのボランティア活動も参加したかった」が、そういう状態の為「親に反対され、未成年であったこともありその回はあきらめる」ことにした。

3 回生の夏、すでに成人していた B 氏は「今度こそインドへ行くためにバイトを詰め込んでお金をかき集めた」。親に反対されることは分かっていたので、「ボランティア参加のための申し込み金を払い、ビザを取得した後の段階でインド

図 2a B 氏の大学院進学までの価値変容プロセス
(1 回生～2 回生での初めてのインド訪問まで)

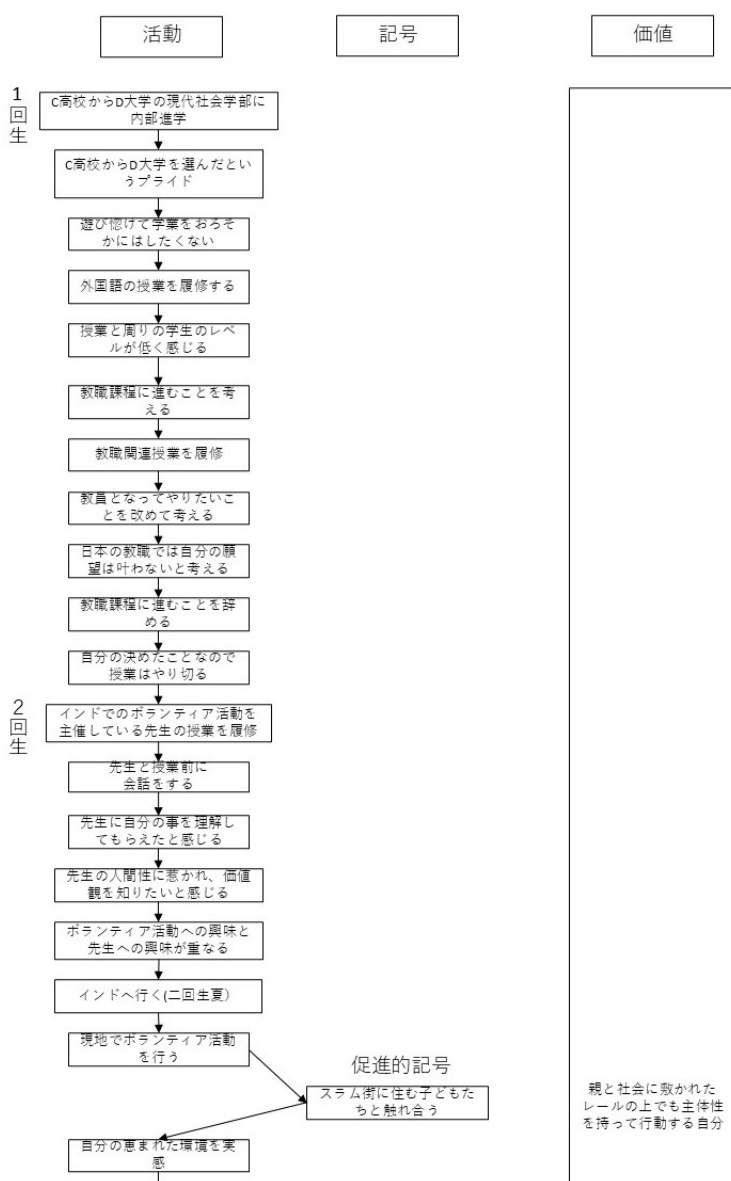
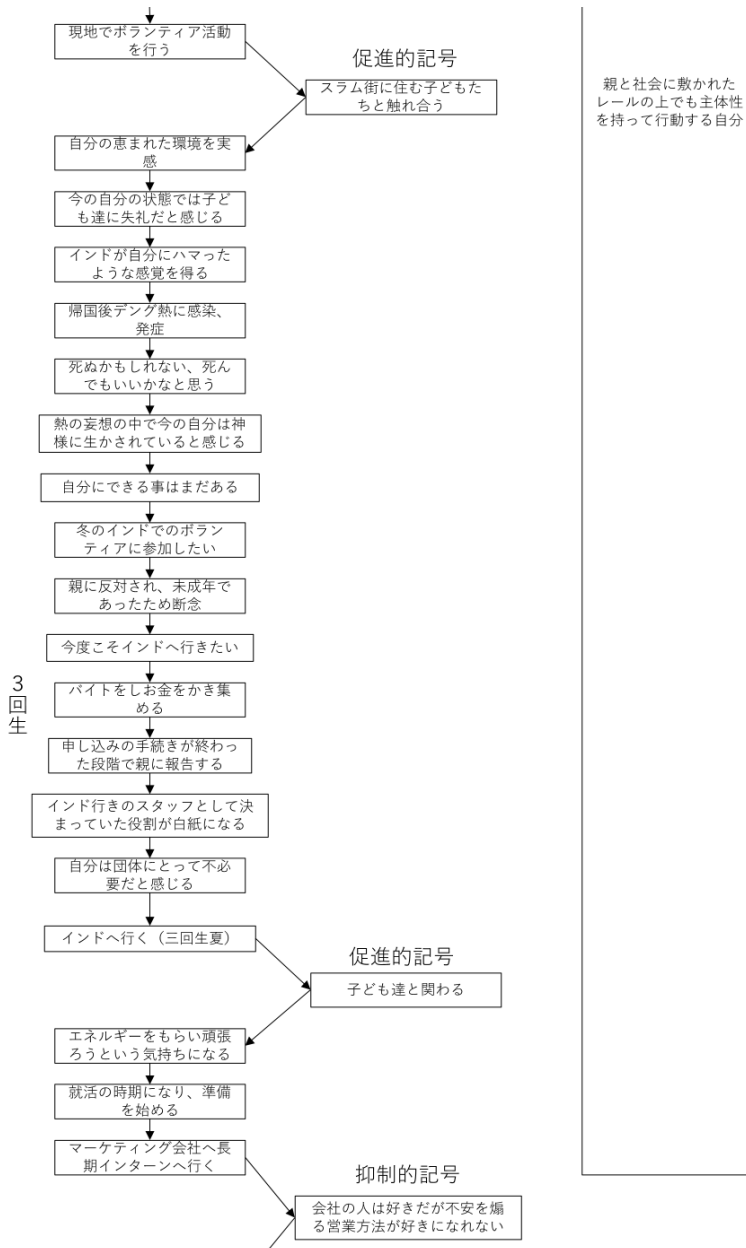


図 2b B 氏の大学院進学までの価値変容プロセス
(2 回生での初めてのインド訪問～3 回生インターン)



行きを親に打ち明けた」。今回は参加者ではなくスタッフ側としてインドへ行くことになっていたB氏だが、「スタッフとしてあらかじめ決まっていた役割が直前で白紙になった」。この出来事から「自分は団体にとって必要ないのではと感じ」、モチベーションが低下した。しかし「インドへ行く」と、『子ども達との関わり』の中から「エネルギーをもらい、また頑張ろうという気持ちになれた」。

インドから帰国後、時期的に「就職活動が開始したので準備を始めた」B氏は、年明けに「マーケティングの会社へ採用前提の長期インターンへ行くことになった」。『会社の人はいい人ばかりで好きだったが、不安をあおって商品を買わせる営業方法がどうしても好きになれなかった』。

(2) 2回生での初めてのインド訪問～

3回生インターン

『会社の人は好きだが不安をあおって商品を買わせる営業方法がどうしても好きになれなかった』B氏は、そういう仕事を「自分はやりたくないと考え」、「インターンを辞める決断をした」。「他の会社の選考をいろいろ受ける」が、「辞めたマーケティングの会社よりもいいと思えず」、「選考の準備もあまりできていない状況」だったため「選考に落ちる日々が続いた」。そのうちにまず「心にしんどさが表れ、次に身体に不調が表れるようになった」。好きだったはずの「本や漫画に触れると不安に襲われ、歌詞のある音楽を聴くことが出来なくなり」、「希死概念や自殺願望が見え隠れするようになった」。そういった状態になったので『就活から心を一旦離す』ため、「夏終わりに行く予定であるインドに焦点を向け、子供たちに会うことを考えて生きる」ことにした。インドへ行くと「予想した通りに生きる意欲が上がってきた」B氏は、帰国後、『就活に戻るときっと精神的に屍になりそう』だ、と考えて「今年は就活をしないという決断をした」。

4回目のインドに行った後卒業までの間に、「初めてゼミの人とちょっと親しくなった」。そうして、「卒業した」。

3 考察 促進的記号と抑制的記号

分析2では、行為連鎖記述法に基づきB氏の大学院進学に至る変容過程を可視化するにあたり、促進的記号に加えて抑制的記号を見出すことができた。ここではとりわけ抑制的記号の機能について、促進的記号との関連で検討を進める。

表1は、捉えられた促進的記号と抑制的記号を時系列順に整理したものである。B氏の大学院進学に至る経験に即して表を説明しよう。B氏は、内部進学で大学に入学した。進学先は他にもあったが、入学した大学を自分で選んだことにプライドを持っており、同級生や授業のレベルが低いと感じながら日々を淡々と過ごしていた。B氏はとある先生との出会いがきっかけとなりインドへボランティア活動に行くこととなるが、そこで出会った『スラム街に住む子ども達との触れ合い（促進的記号）』によって「恵まれた環境を実感し、今の状態では失礼」だと考えようになり、インドが自分にハマったような感覚を得た。次にインドへ行く前にトラブルがあり、B氏は気落ちしていたが『子ども達との関わり（促進的記号）』によってまた「頑張ろうという気持ちになれた」。就活が始まり、B氏はインターンに参加したが、『会社の仕事内容が好きになれず（抑制的記号）』、「やりたくないのでインターンを辞めた」。

ここで着目すべきは、促進的記号から抑制的記号へと切り替わる様相であり、そこで価値の変容が抑制的記号の発生点で起こっていることである。より具体的には、それまでは【親と社会に敷かれたレールの上でも主体性を持って行動する自分】であったが、次第に【親と社会に敷かれたレールよりも自分の気持ちを優先する】

図 2c B 氏の大学院進学までの価値変容プロセス
(3 回生インターン～卒業)

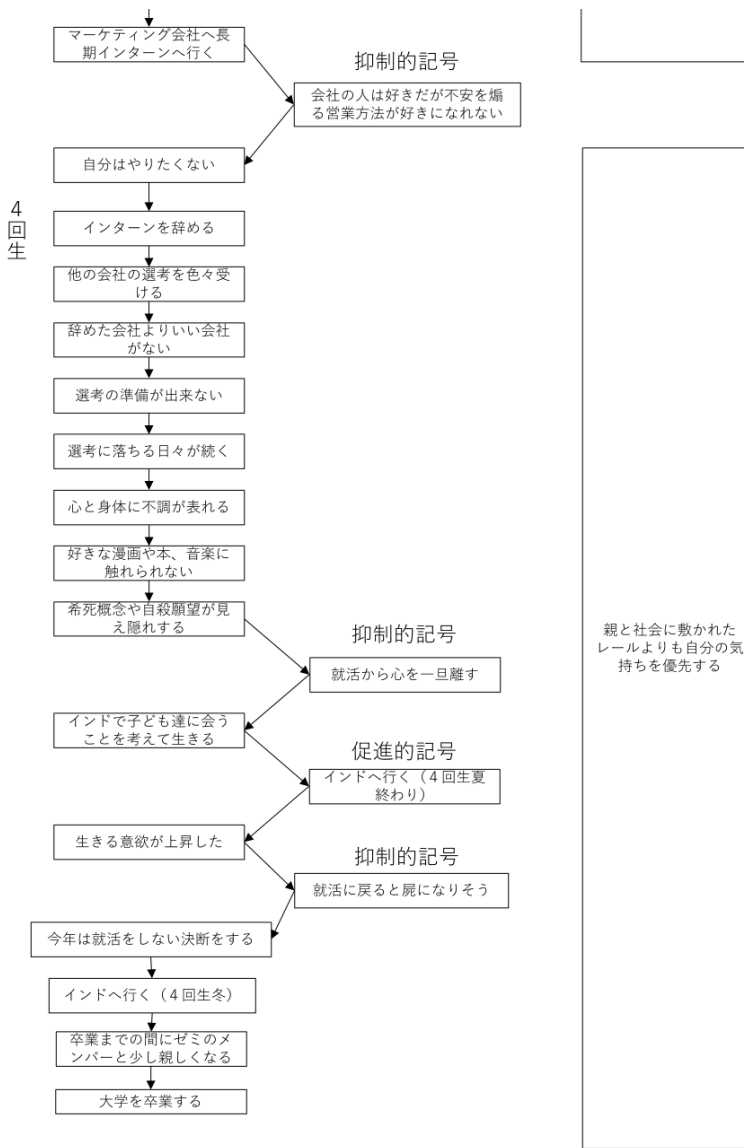


表1 B氏の大学院進学までにおける記号の分析結果と価値変容

価値	促進的記号	抑制的記号
	スラム街に住む子ども達との触れ合い	
	子ども達と関わる	
		会社の人は好きだが不安を煽る営業方法が好きになれない
		就活から心を一旦離す
	インドへ行く(4回生夏終わり)	
		就活に戻ると屍になりそう

ようになっていることに留意する必要がある。もっとも、この時点で突如として価値が変わったのではない。行為するなかで次第に変容していき、抑制的記号への切り替わりとともに、前景化する価値が【親と社会に敷かれたレールの上でも主体性を持って行動する自分】から【親と社会に敷かれたレールよりも自分の気持ちを優先する】へと変わった、と理解することができる。こうした解釈は、B氏の行為を丁寧に読み解き、その主体性がどこにあるのか、ということを検討したことに基づく。一般的には、大学3年生時点で行われる長期インターンは就職活動に有利に働く。【親と社会に敷かれたレールの上でも主体性を持って行動する自分】が重要であると考えられる状態であれば、B氏は、会社の仕事内容が好きになれなかったとしても、就職活動に有利に働くであろう長期インターンで頑張るという選択をしていただろう。しかし、それまでとは異なり、自分はそういう仕事はやりたくない、という抑制的記号が働いたとき、【親と社会に敷かれたレールよりも自分の気持ちを優先する】という価値が前景化し、その結果、長期インターンを辞めている。すなわち、自分自身という存在に主体性を持たせた選択を行ったという

ことが分析できる。

以上のようなことは、シモンドン（Simondon 2013=2018）による個体化の理論を援用した考え（福山・サトウ 印刷中）にも通じる。福山・サトウ（印刷中）は、変容以前のポテンシャルを有する状態を前個体化とし、個体化に関する検討—漸進的な価値の変容の様相を捉え、変容した後の状態を個体化とする考え—を推し進めている。

IV おわりに

本論文で提案した分岐点分析は、ごく簡潔に言えば、行為をいったんすべて活動と捉え、そのうえで、どうしても活動として捉えきれないものを、記号や価値として抽出し整理する、という方法である。従来より、TEAによる分析において、記号をいかに描き出すかということが、面白くも難しい課題として認識されていたことに照らして、本分岐点分析は、変容を読み解く可能性をひらくものとなる。また、こうした分析手続きの簡易化は、生成AIの質的分析への応用可能性を探究する志向性と共振しうるものである。

ただし、TEAは、現象や経験を丁寧に捉える

べく、標準的・画一的な手続きを定めるものではないことに変わりはない。今回提案した分岐点分析も、よい分析をおこなうためのひとつの方法 (way) なのであり、それ以上でも以下でもない。したがって読者はこのやり方のみを金科玉条のように捉えてはならない。

V 引用文献

- 荒川歩・安田裕子・サトウタツヤ (2012) 複線径路・等至性モデルの TEM 図の描き方の一例. 立命館人間科学研究, 25 (1), 95-107.
- 福山末智・サトウタツヤ (印刷中) TEM における時期区分と個体化のクロスチェック表の使用の提案—Auto-TEM の研究を例に. 立命館人間科学研究.
- Glaser, B. G., & Strauss, A. L. (1967) *The Discovery of Grounded Theory: Strategies for Qualitative Research*. Piscataway, NJ.: Aldine Trasaction. 後藤隆・大出春江・水野節夫 (訳) (1996) データ対話型理論の発見—調査からいかに理論をうみだすか. 新曜社.
- 川喜田二郎 (1967) KJ 法—混沌をして語らしめる. 中央公論社.
- サトウタツヤ (2023) 第 1 部 理論, 第 2 章 記号という考え方—記号と文化心理学 I. 木戸彩恵・サトウタツヤ (編) [改訂版] 文化心理学—理論・各論・方法論. ちとせプレス. 27-40.
- サトウタツヤ・安田裕子 (監修) (2023) カタログ T E A (複線径路等至性アプローチ)—図で響きあう. 新曜社.
- サトウタツヤ・安田裕子・木戸彩恵・高田沙織・ヤーン＝ヴァルシナー (2006) 複線径路・等至性モデル—人生径路の多様性を描く質的心理学の新しい方法論を目指して. 質的心理学研究, 5 (1), 255-275. https://doi.org/10.24525/jaqp.5.1_255
- Simondon, G. (2013) *L'individuation à la lumière des notions de forme et d'information*. Grenoble: Jérôme Millon. 藤井千佳世 (監訳) 近藤 和敬・中村 大介・ローラン, S.・橘真一・米田翼 (訳) (2018) 個体化の哲学. 法政大学出版局.
- Skinner, B. F. (1974) *About Behaviorism*. Alfred A. Knopf.
- Skinner, B. F. (1988) Genes and behavior. In G. Greenberg & E. Tolbach (eds.) *Evolution of Social Behavior and Integrative Levels*. Hillsdale: Erlbaum, 77-83.
- 安田裕子・サトウタツヤ (編) (2022) TEA による対人援助プロセスと分岐の記述—保育, 看護, 臨床・障害分野の実践的研究. 誠信書房.

編集・制作協力：特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

